



湧く水のめりめり膨れ田長鳥
 近江なる木の芽田楽串長き
 洞窟マの口隠す青歯朶海響む
 くちなはの淵より上がる鑑真忌
 春祭木偶泣き囀る撥捌き
 焦げ臭き夜明や麦むぎ秋あき至いたる
 エンディングノートの余白鳥帰る
 しまらくはパライゾ見ゆる飛花落花
 天の御食とて玉虫の身を捧ぐ
 はまぐりの吐息に海の濃くなりぬ
 愚直てふ種蒔くために耕せり
 金雀枝の撩乱よ昨夜べの星落ちし
 暮らすとは水使ふことレタス噛む
 晩春の前のめりなる日差かな
 振花や反戦の声揉み消され
 容赦なく灰まく男涅槃雪

岩井かりん
 栗原利代子
 満田光生
 有手勉
 大野今朝子
 原田宏子
 横地妙子
 我妻民雄
 岩上諒磨
 森山夕香
 高橋節子
 ビュニャールしづ子
 松井弓
 柿谷有史
 沖田泰子
 加藤律子

*

一斉に捲る楽譜や夏来る
 紅薔薇の紅より深き怒りかな
 進級の子の肩にふとくすみ見ゆ
 戦争をやめよと麦の穂の怒髪
 鯉のぼり一際高し起重機に
 行く春の夜にたどりたる遺句五百
 食けへ食けへとだけの津軽の花筵
 宵闇や蚯蚓の気配此処彼処
 教へ子のその不揃ひな夏の貌
 クワイアの若き友の死桐の花
 青時雨ルバイヤートを日暮まで
 初燕遣り返さぬが祖の教へ
 たんぽぽの絮や着弾は一瞬
 田水張り写る我が家は竜宮城

岸元忠義
 草野薫子
 太田薫
 宮島英子
 土屋安子
 辰野利彦
 島田謙吉
 沖野外輝夫
 山田一政
 佐藤たまき
 森千恵子
 遠藤順子
 高橋洋子
 原隆子

巻頭寸言 福岡伸一と平野啓一郎の対談を読んできて、平野が娯楽性の強い小説、エンターテイメントと純文学の違いに関して巧みな言い方をしており、感銘した。前者は「読者がすでに知っていることを巧みに組み合わせて物語にするもの」。一方後者は「皆が知っていると思いついていながら、新鮮な新しい価値を示すもの」ではないかと言っている。

俳句に関しても、知っていることを俳句にしても、当たり前。実は、知っていると思いついていながら案外知らないことを表現するのが俳句だと、私はしばしば言っている。俳句の新しさは奇想天外のことなど求めているわけではない。新鮮だと感じるのを知っていると思いついていたことが、言葉で表現されて初めて、本当に納得したと感ずることである。

暦のことはを上手に生かした俳句―麦秋至

焦げ臭き夜明けや麦秋至 原田 宏子

「麦秋至」は中国から入った七十二候の小満の三候（五月三十一日から六月四日頃まで）をいう。麦刈の時期を迎えたという意。世界の穀倉地帯、ウクライナでの戦争が終結しないことがみんなの意識にあるためか、麦秋の光景が気になる。世界が「焦げ臭い」。いつまでも麦秋が続いている感じ。晴れ晴れしない。掲句にもどこか戦場意識が漂うようだ。

湧く水のめりめり膨れ田長鳥 岩井かりん

春祭木偶泣き噓る撥捌き 大野今朝子

物語俳句の得意な作者。近松人形浄瑠璃の最高の場面である。よよと泣く木偶に奏者はでんでんでん、満身の力を込めた撥捌き。高山にまだ雪が残る飛驒の春祭か。

しまらくはパライゾ見ゆる飛花落花 我妻 民雄

爛漫たる花が繽紛と散る。その束の間、天国が幻想されたもの。「飛花落花」は無常を思わせる調子がいい言葉である。日本古来の無常にもどこか浄土を意識した感じがある。スペイン語やポルトガル語の天国「パライゾ」は北原白秋好みの詩語で、文人には親しい。自由な飛翔が楽しい。

天の御食とて玉虫の身を捧ぐ 岩上 諒磨

お洒落な玉虫の句に感心した。昨年、わが墓処で玉虫の亡

今月の秀句

くちなはの淵より上がる鑑真忌 有手 勉

鑑真は奈良時代、聖武天皇の要請により天平勝宝五年（七五三）来日。十年間東大寺戒壇院で一人前の僧侶になったことを証明する受戒者の教師となり「三師七証」といわれる授戒の儀式を行った。天平宝字七年（七六三）入寂。七十六歳。唐代の中国の揚州出身。視力を失うまで五回にわたる渡航の失敗にもめげないで来日した宗教心の強さは掲句の「淵より上がる」蛇の映像が鮮やかに暗示している。迫力がある。

ほととぎすは異名が多い。死出の田長とか賤の田長もその一つ。死後に行く冥土から飛来する鳥だという。明るい現代社会からは暗いイメージがあるが、古人はこれを暗いとは思わなかった。生と死が行き来しているのが時代の空気であった。科学技術が発達し、医療が行き届いている現代が明るいのである。田植の時期には湧水がみるみる脹れる。田長鳥が時期を知らせる。日本人は暮しの中の鳥と認めていた。

エンディングノートの余白鳥帰る 横地 妙子

遺言書ではないが終末に関わることを綴ったノート。その余白に何を書こうか。顔をあげて、折から北へ帰る鳥を認めた。北はそれとなく終末を思わせる方角。作者が俳誌「壺」の齋藤玄の門下と知ると、さすがに玄ほどの巧さが句におおりの。掲句など玄ほどの壮絶さはないが、骨格がたしか。

近江なる木の芽田楽串長き 栗原利代子

近江はどこも木の芽田楽が旨そう。京の郊外、水の風情がある。串が長い点に着目。この一点で着想が落ち着く。

洞窟の口隠す青歯朶海響む 満田 光子

沖繩詠。ひめゆりの塔の真下の洞窟を思った。沖繩戦以来海はどよみっぱなし。凡てを知る海に平安な時はないのである。大戦の語り部も亡くなり、ことごとく忘却の彼方へ。歴史は知的に纏められても、情は伝わらない。

骸を採取した私は同感。わが身代わりに玉虫詠をお作りいただいたような実感がある。「天の御食」がいい。

はまぐりの吐息に海の濃くなりぬ 森山 夕香

自在な発想である。春の海に満ち足りた思いがある。

愚直てふ種蒔くために耕せり 高橋 節子

耕すことは本来愚直ではないが、毎年同じことを繰り返す、いい加減嫌になる気持はわかる。辛抱辛抱と唱えながら。

金雀枝の撩乱昨夜の星落ちし ビュニャール

えにしだは波郷の（金雀枝や基督に抱かると思へ）以来、キリスト教の華やぎを纏う。直感とは不思議なものだ。掲句の金雀枝と流星の連想には西欧文明の爛熟感があるのではない。世界はかつての西欧が主導した時代とは大分違う様相を呈している。これは生れ変わる吉兆なのか、凋落の兆しなのか、しばらくわからない。フランス在住の作者が健在。うれしいことである。

暮らすとは水使ふことレタス噛む 松井 弓

「水」が暮しのいのち。ナイーブな感性が初々しい。

晩春の前のめりなる日差しかな 柿谷 有史

急に暑くなってきたことへの体感の作。視覚がご不自由な作者には「触れる」（触覚）がいのち。日差しに触れている。「前のめり」という表現に心理が籠る。鋭い。健常者が鈍感になってしまった触れる感じを大事に表現している。

振花や反戦の声揉み消され 沖田 奏子

じわりじわりと反戦の声が消される。気がつかないうちに声は乏しくなり、ジャーナリズムの表舞台から消されてゆくのであろう。目立たない振花を印象づけた点が鋭い。

容赦なく灰まく男 涅槃雪 加藤 律子

涅槃雪（旧暦二月十五日）の頃に降る春の雪。参詣者の足を元を氣遣い、参道に灰を撒いたものか。あるいは畑中か。後者とすれば、いささか八つ当たり気味。馬鈴薯作りの地を陰性にする作業か。光景に一本気の迫力がある。

紅薔薇に込めた怒りとは？―出口が見つからない怒り

紅薔薇の紅より深き怒りかな 草野 薫子

現代は怒りが充滿している。怒りのはげぐちがない。世界に溜まるばかり。真紅の薔薇に八つ当たり気味に怒りがたま

今月の秀句

一斉に捲る楽譜や夏来る 岸元 忠義

爽快な立夏の作。オーケストラの演奏場面が浮かぶ。心中すかっとなつたい。そんな願望が句になったものか。心地よい。「岳」高山支部の事務局長。支部を手堅くまとめ、信頼がある。行為に対価を求めない、直向きさがいい。久方ぶりに高山の作者を推奨できるのがうれしい。住斗南子もどんなに喜んでいることか。

む。その数、五百句以上。生前句集に纏め得なかったことが作者には惜しまれる。間に合わなかったのである。

食へ食へとだけの津軽の花筵 島田 謙吉

花見の席の充足感を捉え、「食へ食へ」が響く。津軽人の人の良さが日本の田舎を彷彿とさせる。山ほどある鄙、津軽はなつかしさを醸し、深田久弥の『津軽の野づら』を愛読した若き日思い出す。型に嵌らない方言の自由さがいい。

宵闇や蚯蚓の気配此処彼処 沖野外輝夫

宵闇は秋の名月後、二十日過ぎの月の出が遅い闇をいうが、ここは夏に出る蚯蚓から夏の夜を思わせる。が、やはり近年の気候変動を思えば、暑さ残る秋の宵闇であろう。俳句の季語がぐらぐらし出している。これも人間の仕業がもと。季語分類に拘らない現象に目を止めるのも、作者のような生物多様性の保全を専門とする学者俳人の新たな問題提示と見たい。早稲田大学人間科学部、信州大学理学部の多彩で自在な先生。

教へ子のその不揃ひな夏の貌 山田 一政

何十年ぶりに、高校での教え子のクラス会に呼ばれたときの感慨である。馬鈴薯のような「不揃ひな夏の貌」。いい顔だ、あの貌が、と唸る。みんな新たな半生を背負って、次代の貌。先生も頑張っているぞというのが精いっぱい。

クワイアの若き友の死桐の花 佐藤たまき

「クワイア」は聖歌隊の意。コーラスのメンバーの死は悲しい。崇高である。桐の花は優しさ無限。思いが残る。

る。祝賀の臆に相応しい紅薔薇が怒りの対象になる。かつてフランス革命を題材にした「ベルサイユのばら」という漫画、さらにアニメがあった。掲句は現代の不安のもとにある緊張を齎す出口のない「怒り」を紅薔薇にぶつけたものか。熱心な作者だ。目先のことでなく、真を突けといっている。意欲作に違いない。

進級の肩にふとくすみ見ゆ 太田 薫

生徒の抱える「くすみ」を見逃さない優れた先生である。新学期、張りきる気持に伴う疲れが陰りとしてあろう。先生の眼は鋭い。「肩」に現れる。微妙に肩が下がる。内面の問題であらうか。教えられる作だ。

戦争をやめよと麦の穂の怒髪 宮島 英子

穀倉地帯ウクライナの想像には麦秋風景が広がる。一斉に熟麦が髪を逆立てている光景だ。叫んでいる。後世、愚の愚の象徴になるウクライナ戦争。二十一世紀の悪夢。一日も早く止めねばならない。

鯉のぼり一際高し起重機に 土屋 安子

現代のブルトナーの最先端の機器、起重機に結わえられた鯉幟。心が慰さむ。起重機を出し、着想が鮮やかだ。

行く春の夜にたどりたる遺句五百 辰野 利彦

前書に「悼平谷嶺樹君」とある。作者の親友、俳人平谷嶺樹さんの死を悼んだ作。平谷さんは印刷会社日本ハイコムを興した会長、苦勞人。晩年に旧友の作者に勧められ俳句を詠

青時雨ルバイヤートを日暮まで 森 千恵子

わが愛読のルバイヤートはフィッツジェラルド訳から井田俊隆が日本語に訳した南雲堂版。「いずれの日にか、土に還るわれら／せめてその日まで楽しもう／いまひとときの人生」。生きていたとは幻。人生は死につつ生きている。無常に満ちた享楽詩集。十一世紀のペルシヤの数学・天文学者、同時に詩人のオウマ・カイヤムの四行詩を集めたもの。

雨上がりの青葉からの雫を楽しみながらルバイヤートを地で行く、一日の楽しみ。知的関心横溢。繊細で豊かな暮し。

初燕遣り返さぬが祖の教へ 遠藤 順子

両隣と助け助けられながら生きる。初燕の緊張感がいい。

たんばの架や着弾は一瞬 高橋 洋子

戦争は永年の平和を一瞬に無にする。愚である。たんばの架の平和を。今月号には戦争を拒否する叫びの作が多い。

田水張り写る我が家は竜宮城 原 隆子

田に水が入り、夕方灯が点く。水面に無数のファンタジー。この時期こそ竜宮城があちこちに。我が家は私が乙姫さまかしら。

他に推薦候補作を掲げる。

まひまひの角の間のだつ広 我妻 民雄

朝礼の児のごとく立つチューリップ 高木 忠雄

来世では孔雀ときめてむ草 添田 朋子

未完といふ未来のありて木の根開く 山田 春草